中山隆吉教授記念号によせて

中山隆吉先生は，旧東京教育大学文学部助手を経て，1970年４月に本学一般教育部専任講師として就任されました。爾来，2000年３月に定年退職されるまで30年にわたり本学学生の英語教育に一身をささげ，さらに文学部英米文学科，同研究科においては英語学特講（文法論），英語教育方法論を担当されて，先生の後進となるべき英語学，英語教育の専門家の養成に尽力されました。この間，1984年，1992年には英語入試問題出題採点総責任者を，1983年，1994年には英語科主任を歴任されました。そして，一般教育部の廃止に伴って1995年４月に大学教育研究部の所属となり，その後1998年４月に経済学部に移籍され，経済学部の発展と英語教育の充実に活躍されました。また，1986年以降マンドリンクラブ部長，立教ピアノ会などの音楽クラブの顧問として，課外活動の面でも精力的に学生の指導に当たってこられました。

先生の研究の足跡はおおよそ３段階に分けて追うことができます。1970年代前半までの中山先生の研究は，N. チョムスキーの変形生成文法から C. フィルモアの各文法理論までを基盤として，これを先生独自の視点から討究したものと言うことができます。特に，伝統的な国文法とは趣を異にした各文法の理論を日本語研究に適用し，その名詞修飾部，位置格，目的格などを日英で比較の上，分析を試みた諸論文は，その手法の斬新さゆえに注目に値します。先生は，大学英語教育学会（JACET）で企画委員，あるいは評議員などの役職を歴任しておりますが，本学への就任を契機に英語教育学の分野に進出され，1976年度には文部省科学研究費を得て「外国語としての英語のヒアリング能力形成要因の実証的研究」という全国的規模の共同研究に参加されました。その一環として1975年，日本学術振興会の支援を得てカリフォルニア大学に留学し，そこで本国では未知であった誤答分析の理論を応用して発表した JACET 紀要論文は学会に多大な反響を呼びました。そして，1980年代以降の先生は，英作文指導など日常の教育現場での実践として，文と文の接続方法（sentential cohesion）をテーマに日英語の慣用の実態に迫った比較研究に踏み込んでおられます。

このように，中山先生のわが国での英語学，英語教育学会における活躍には注目すべきものがあります。また，先生の学会での活躍はそのまま本学の英語教育に反映され，本学の教育と研究の質を高めることに貢献しました。立教大学は，以上のような先生の学術上・教育上の功績の顕著なことにより，2000年７月先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生は2000年３月に定年退職されましたが，先生のご功績を永くとどめるため，本号を先生の記念号といたします。先生の今後のご活躍を記念すると同時に，これまでと変わらぬご助力

を本学と経済学部のために賜りますよう願ってやみません。

2001年5月

経済学部長　老 川 慶 喜